

## 人（子ども）との関わり、自分自身との関わりを考える

国立特別支援教育総合研究所 牧野泰美

スタタリング・ナウ 2011. 4. 18 No.200（日本吃音臨床研究会）より

## 1 はじめに

東北から関東を広く襲った未曾有の大震災。その被害の大きさに胸が痛む。加えて、原発事故も重なり、本当に多くの人の生活を奪い、脅かしている。本稿執筆現在（2011.3.30）、死亡が確認された人、届け出があった行方不明の人の数は増え続け、被災地の状況等も連日テレビ画面に映し出されている。一方で、支援の輪は拡がり、多方面から、一人じゃない、仲間がいる、等々のエールも送られている。各々が自分にできることを問い、行い、つながっていくこと、支え合っていくことは本当に大切なことである。「あなたはひとりではない」は、被災された人にとっても、今、まさに必要なメッセージだと思う。

こうした非常時にも、多くの人が意識しにくい、少数かもしれない人や事象に思いをはせること、想像力はなくしたくないと思う。報道番組で流れる、体育館に避難している人や子どもたちの様子、困難な状況の中で手作りで行われる卒業式や、学校・クラスの仲間であつち合っている姿等を見るにつけ、被災地にいる不登校やひきこもりの状況にある人にとってはまた別の困難、苦しさがあるだろうと感じるし、人とのコミュニケーションや、人と接することに難しさを抱えている人、放送や指示の内容を把握すること・理解することが難しい人、見通しが持てないことに不安の強い人、変化に非常に敏感な人、補聴器の電池がなくなった人、等々、何らかのハンディのために避難生活に困難を抱える人も少なくないと思う。

少数、人に理解されにくい、等々においては吃音もそうだろう。そんな中、この『スタタリング・ナウ』が200号を数えると聞いた。伊藤伸二さんはじめ関係の皆さんのこれまでのご努力に敬意を表すると同時に、日頃、お世話になりながら一読者となること以外、何のお役にも立てないでいる自分が情けなくもなる。200号達成のお祝いの意味もあるが、せめて拙稿をお届けできればと、日頃考えていることなどを綴ってみようと思った次第である。

## 2 伊藤伸二さんとのつながり

筆者の勤務する国立特別支援教育総合研究所（神奈川県横須賀市）では教員研修を行っている。各都道府県からの派遣で、現役の学校の先生方が講義や協議、演習等からなる研修を受講する。一つのコースの研修期間は2ヶ月余りであるが（1年間の研修もある）、主に学ぶ障害領域の違いで、研修の時期を分けて実施しているため、研究所は年間を通して各地から参加している多くの先生方で賑わっている。敷地内に食堂や宿泊棟があり、仲間と飲食を共にし、語り合い、多くの先生が、全国につながりをつくって地元に戻って行く。そして各地の特別支援教育のリーダー的な役割を担う。

筆者は言語障害教育の研修を担当している。2ヶ月余りの期間の中で、特別支援教育の動向や最新情報も含め、基礎的知見から、指導・支援の実際まで言語障害教育全般にわたり研修が深められるようカリキュラムを作成している。このカリキュラムの中で、この10数年、伊藤さんには「吃音問題への支援と対応」の講義を担当していただいている。朝から夕方までの6時間程の講義では、伊藤さんにとっては伝えたいことのほんの一部しか話せないだろうし、十分なお礼もできないのに、いつも喜んで？遠路神奈川まで来てくださっている。講義後は、研修員有志とともに伊藤さんを囲んで食事をするのが恒例となっている。伊藤さんの帰りの時間もあるので、可能な時間までということになる（それでも2時間以上は歓談できる）が、いつも話が弾み、最寄りの京急久里浜駅で見送ったあと、新横浜でうまく新幹線に間にあつただろうか、と心配になることも度々である。

他にも難聴・言語障害教育の全国大会（全難言）や九州地区大会（九難言）等をはじめ、ことばの教室の先生方の研究会でも御一緒するなど、日頃様々なお力添えをいただいている。伊藤さんとの出逢いは、かつて研究室での筆者の上司だった故・大石益男先生によるところが大きい。また、筆者の故郷であり、以前の勤務地でもある岐阜県の知り合いが伊藤さんと深くつながっていたりもし

て、人、つながり、縁、というのは大きいなとつくづく思う。先述した研修の講師に毎年お招きするようになる前にも、単発で3日間程の日程で開催していた講習会に来ていただいたこともあり、「吃音を生きる」「吃音とつきあう」という発想そのものも、吃音に直接関係することか否かはともかく、自分がそれまで様々に考えてきたことと共通することが多かった。

### 3 筆者の仕事の源流

筆者自身は学生時代から、特殊教育（当時）の学科に学び、主に言語障害教育を専攻していた。自分はなぜ話せるのか、なぜ人の話が分かるのか、ことばはどうやって身につくものなのか、そのことばの獲得がうまくいかない人がいることをどう捉え、どう支えていったらよいのか、そんな疑問からのスタートだった。また、手話サークルへの参加をきっかけに、聴覚障害の人とつながり、交流を深めるうち、聞こえないということや、手話という言語について考えたりもした。研究の第一歩も言語学や言語心理学といった領域を学びながら、ことばの獲得ということに対して様々な側面から考えてみようということから踏み出したように思う。子どもの頃から、周りの友人を見ながら、なぜそんな上手な？都合のいい言い訳や（屁）理屈が言えるのだろうか、なぜそんな（駄）洒落が言えるのだろうか考えたりしたこともあり、筆者の関心も、どちらかということばの形式的な側面より、行間を読む、言外の意味を把握する、等々に代表される機能的な側面に向かい、いわゆる語用論の領域の発達的研究を行っていた。卒業論文や修士論文をまとめる頃は、話し手の意図を文脈から類推する力はどうか、聴覚障害の人はどうか、そんな観点から取り組んでいたが、そもそも相手の意図をくみ取るとか、文脈を読む、行間を読むということは、広く考えれば、語用論にとどまらず、ことばを用いる、いやコミュニケーションを営む人と人の関係にも及ぶものだとも考えるようになった。学生を終えた後、郷里の岐阜で聾学校の教員として数年間勤めたが、子どもと、あるいは職員とわかり合うということはどういうことなのか、なぜ伝わらないのか、なぜわかり合えないのか、どうしたらわかり合うのか、ということ強く感じるようになり、「ことば」そのものへの追究もしつつ、「コミュニケーション」とか「関係」ということについて深く考えるようになった。

研究として、実質的に、コミュニケーションを掘り下げ、発達や、諸能力の獲得ということも含めていわゆる「関係論」的な視座からアプローチするようになったのは、平成4年に現在の職場（当時は「国立特殊教育総合研究所」）に移り、故・大石益男先生と数年間御一緒したことや、大石先生を通して、鯨岡峻先生や、浜田寿美男先生と出会えたことも大きい。通じる、通じない、通じにくい（言い換えるならば、関わりにくい、つきあいににくい）というコミュニケーションの成立や障害の本質及び構造の検討、コミュニケーションや関係がうまくいかない状況を変化させるために、子どもと関わる側の（自分自身の）内面・世界観を見つめる視点、関わる側の内面や、人や物に対する見方・視線を操作する観点の整理等、実践的に議論を深めていくことは筆者にとっては充実した時間・取り組みとなった。

また、「関係」という観点から暮らしの充実を考えるにつけ、能力の獲得や向上（ことばのことで言えば、明瞭な構音の獲得、流暢性の獲得、語彙力や構文力の伸張、等々）が、本当に暮らしの充実、幸せにつながるのか、いわゆる障害の改善や能力の伸張が図られなければ暮らしの充実、幸せはないのか、といったことも考えるようになった。吃音で言えば、流暢に話せるようにならなければ暮らしの充実はないのか、幸せはないのか、吃ったままの幸せはないのか、という問いである。これらの作業は、自分の世界観や内面を見つめる、自分のコンプレックスと向き合う、自分を知る、人の内面を見つめる、子どもや人との関係のありよう、関わる自分のありようを見つめる、といったことにもつながっていった。

### 4 自分を振り返る

筆者は、岐阜県の片田舎で祖父母、両親のもと、長男として生まれた。祖父は自分の考えを曲げない、言い出したら聞かないタイプの人で、しかも「もったいない」「惜しい」という価値観が強い人だった。その息子である筆者の父は、反抗することもままならず、そこに嫁入りした筆者の母は、舅には従わざるをえず、かなり苦勞したようだ。母からすれば、舅の手前、幼い筆者が何か物など壊してはいけないので、神経を使う毎日だったと思う。後に母は、「子どもは、いろんなものに手を出し、壊したりしながら、覚えたり、興味を持ったりしていくから、大らかな環境で育ててやりかった」と話していたことがあるが、実際、家の

中にある様々な物、子どもが興味を持ちそうな物には手を出せないような雰囲気、筆者は物に触ったり、壊したりといったことをあまり経験せず育ったところがある。幼稚園に通う頃、周りの子どもたちが、器用にハサミを使い、切り貼りしたり、粘土細工や折り紙をしたりする様子を見ながら、自分はどうして皆と同じようにできないんだろう、自分は皆と違うダメな人間なんだ、とコンプレックスを持っていた。今でも、手先は不器用だし、機械物はどうも苦手で、新しい便利な物にもなかなか手を出せないでいたりする。

### (1)人・物・事象への多様な見方、視線

コンプレックスと言えば、自分の名前に対してがそうだった。筆者の下の名前は「やすみ」と読む。先述の祖父が付けた。筆者の両親は本当は別の名前を付けたかったのだろうが、そこは「自分が天下」の祖父。孫の名前も人の意見などには耳も貸さず、というより人が祖父に意見を言えるはずもなく、勝手に決めたい。当時の政治家の名前から付けたようだ。子どもにとって、状況にもよるが、幼い頃に周囲にいるのは家族をはじめ隣近所の人たち、つまり多くは大人である。物心がついた頃、家族や近所の人から「やっちゃん」「やすくん」等と呼ばれていた記憶がある。それが、幼稚園や学校に入ると、周りには同じような年頃の子どもが多くなる。その頃、自分の名前が嫌になった。「やすみ」は「お休み」なのだ。「まきのやすみ君は、お「休み」のはずなのにどうして来てるの？」となる。今の自分だったら、「あ、そうか、そうだね。じゃあ僕は休ませてもらうね。」などと言って、あわよくば本当に休ませてもらうが、小心者の牧野少年にはそんなことはできず、ただただ自分の名前が恥ずかしかった。加えて、女の子と間違えられるという経験も多くなった。

年度当初に、新しい担任の先生が出席をとる際にも、当時は男女別の名簿だったので、筆者の名前は名簿の男子の方に入っていたのだが、いよいよ筆者のところになって「まきのやすみちゃんかな？、やすみくんかな？」と呼ばれたことがあった。本当に自分の名前が恥ずかしく、嫌でたまらなかった。「先生が小学生にこんな思いをさせるなんて」といった気持ちにさえなった。いかにも男らしい名前の同級生が羨ましかった。

しかし、いつの頃からかこの名前、意外といいもんだなと思えるようになった。人にすぐに覚えてもらえたり、ずっと憶えていてもらえたりする。あれだけ嫌だった名前に対して、名前を変えたわ

けではないが、違う角度から見てみたら、案外いいものじゃないか、と思えるようになったということ。これは、今直面している様々な課題、問題等々に対して、それを無くしたり、取り除いてしまったりできればいいが、それが簡単ではないとすれば、その課題、問題を、ある一点から固定した見方で見るのではなく、様々な角度から、様々な見方をしてみると、案外つきあえるぞ、とか、案外いいじゃないか、という面が見つかるのではないかということだ。「嫌」なのか「いいもんだ」かと思えるのかは、それとつきあう自分の見方によって変わるのだと思う。つきあわなくてすむのならいいが、つきあっていかざるを得ないのなら、楽につきあえる見方を探したいと思うようになった。それは人にも、物にも、仕事にも、あるいは、ハンディや、自分のコンプレックス、自分自身に対しても言えることだと思っている。

### (2)「殻」ごと大きくなればいい

名前に対するコンプレックスが影響したのかどうかは分からないが、幼い頃、筆者は人と話すことができない、いや、極端に言えば、家族以外の人と会うことすら難しい子どもだった。家の中では大丈夫なのに、一歩外に出るとダメだった。母親と近所に買い物に行く途中、誰かが近づいてくると、いつも母親の背中に隠れる子だった。恥ずかしいというか、その人の前でどんな顔をしてどうしていたらいいのかが分からなかったのだと思う。お正月など、親戚一同、母方の実家に集って食事をするときも、皆と一緒に居られず別の部屋に食事を用意してもらい、一人で食べていたことを思い出す。小学校に入学しても、しばらくは、自ら挙手して発言することなどできなかった。

時がたち、いつしか人と話せるようになった。何かちょっとした自信・勇気を持てたということもあるが、このクラスの中なら（家族と同じとまではいかないが）、自分を出しても大丈夫だと思えたのだと思う。別の集団ではまた違っただろう。だから（今でもそうだが）、決して自分の「殻」を破ったわけではない。「殻」の中に、外の世界のものを一つ、二つと入れてきたような気がしている。それだけでも随分、楽になったように感じていた。そうしてどんどん「殻」の中に外のものを取りこみながら、「殻」ごと大きくなってきたのだと思う。今では「殻」の中身が随分増えて、実質「殻」を破ったのに近い状態になっているのだと思っている。

子どもが自分の「殻」を破ればいいが、そう

でないなら、その子の世界に、外のもの（たとえば「サッカー」でも「折り紙」でも）を一つ入れてあげる、つまり外のものを一つ好きにさせてあげれば、少し世界が拡がり楽になるかもしれない。そしてまた一つ好きなことを増やしてあげる。そうしてその子の「殻」が少しずつ大きくなっていく。可能なら「殻」は破った方がいいのかもしれない。覆い被さっているものがとれ、成長できる。しかし無理して破る必要はない。「殻」ごと大きくなればいい。そうも思うようになった。

### (3)話して欲しい、コミュニケーションして欲しいと思う側は？

先に触れたように、幼少期、筆者は人と話すこと、自分を出すこと、人とつきあうことを非常に苦手とする、それらが難しい子どもであった。そんな筆者が小学校に入学した頃のある授業の風景。先生からの問いに、同級生の多くは「はいっ！」と手を挙げる。どんなことを答えても何でも正解になるような問いである。しかし内気な筆者は当然手が挙がらない。指名された子が答える。先生はその子をほめ、さらに他の子の挙手を促す。こうしたやりとりがしばらく続いた後、先生は「どんな答えでも間違っていないし、笑われないから勇気を出して手を挙げてごらん」と励ましてくださるが、筆者の手は挙がらない。さらにしばらくして「本当にどんなことを言っても大丈夫だから」と念を押されるがやはり同じである。要するに「どんな自分をさらけ出しても大丈夫なんだよ」と言ってもらっているのだが、やはり自分を出せない状況が、日々続いていくのだった。

上記のように先生に励まされるたび筆者は「今まで答えた子は確かに笑われなかった。でも自分が答えた時に絶対に笑われない、大丈夫な証拠がない」「大丈夫な証拠を見せてくれたら手を挙げられるのに」と考えていた。この「大丈夫な証拠」を大人ははたして示せるだろうか？ 子どもに話して欲しい、自分を出して欲しいと思っている大人の側は、子どもに自分を見せているだろうか？

その「大丈夫な証拠」はともかくとして、好きなものやことを見せていたら、子どもが自ら大人と話す、つきあうきっかけを見つけるかもしれない。「先生も毎週ウルトラマンを見てるんだ」と分かるだけで、当時筆者は先生ともっと話ができたかもしれないと思う。

また、筆者は当時、日々、先生から逃げてもいた。先生が近づいてくると、何か自分のいたらないところを指摘されるものと思いこんでいた。先生

に何を言われても、叱られても平気でいられる子（そのように見えただけかもしれないが）、指摘されたことに対して真正面から立ち向かおうとするファイトある子はいいが、筆者は先生に何か言われたら、へこんでしまい、しばらく立ち直れないに違いないと思っていた。だから何も言われない方がいい。そのためには先生に近づかないのが一番、と思っていたし、実際できるだけ近づかないようにしていた。

先生の立場からすれば、仕事上子どもを「評価」はするだろうが、決していたらないところを指摘するために、あるいは注意するためだけに子どもに近づくわけではない。少しでも触れ合おう、コミュニケーションしようという思いが強いのだろう。しかし、筆者のように被害妄想かもしれないが、子どもに逃げたいと思ってしまうのでは、なかなか難しい。

人は話したくない人とは話さないし、嫌なことは話さない。話して欲しい、コミュニケーションをして欲しいと思う側が、相手にとって自分はどんな存在なのか、自分を見つめてみることは重要だと思う。

以上、まだまだ挙げればエピソードには事欠かないが、筆者の幼少の頃を振り返りながら、いろいろと考えてみた。確かに、自分の周囲の人や、様々な課題、自分自身の抱えているコンプレックスや特徴、等々につきあっていく上では、苦しい向き合い方、不快な状態として向き合っているよりは、そこそそ楽に向き合っていた方が、相手が人であれ物事であれ、関係は深まり、相互にいい影響を与え合い、結果的に学べること、プラスになることが大きい。しかし、そういう筆者も実際は、人や物事、あるいは自分自身に対していつもそのような見方、向き合い方ができているわけではないし、どうしたらいいか苦しみ、もがき、考えながら生きている。自分自身を受け入れることもそうそう簡単なことでもないだろう。自分のありのままを認め、受け入れることが大切というスタンスからすれば、自分自身を受け入れられない自分を受け入れる、認めるということも、また必要なことかもしれない。

「殻」の中に外の事象を一つずつ入れていけばいい、「殻」は破れなくても「殻」ごと大きくなればいいと思いながら、実際には自分の「殻」に打ちのめされるときもある。今もって、自分を出せない自分、一歩踏み出せないでいる自分に歯がゆい思いをすることもある。先の表現を用いれば、

随分「殻」の中に多くの事象を取り込んできて大丈夫な世界が増えたが、(生きる上で概ね不都合はないので) その安全な世界で自己を保っていて、さらにまだ「殻」の外にある事象をなかなか取り込めないでいるということなのだろう。

いずれにしても、これからも自分を見つめ、自分とのつき合い方を考えながら生きていくのだと思う。この自分を見つめること、自分を知る、学ぶという作業について、数名のことばの教室等の先生方に執筆いただき編集した冊子「吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり」が科学研究費補助金の補助を受け、現在印刷中である。

## 5 人(子ども)との関わりを考える

### (1)人(子ども)との関係・関わる側の視線

人(子ども)と関わる上で、その「関係」を考えてみるのは重要である。たとえば、子どもにとって自分は、話したい相手、話すに値する相手となっているか? 一緒にいたいと思われる相手となっているか? 自分は子どもと会うのを、話すのを楽しみにできているか? 自分の好きなことを伝えているか? と問うたときどうだろうか。

コミュニケーションは、情報を伝え合う側面をもつと同時に情動を伝え合う側面も持っている。「ことば」の力だけが伝わり合う原動力とは限らない。相手の気持ちが分かる、自ずとくみ取れる、そんな関係にあることもコミュニケーションの成立を助ける。分かってもらう、感じようとする、伝えようとする、同じ思いになってみようとする、そんなことが大切だと思う。

関係が難しい、うまくいかない、関わりにくいと感じるとき、関わる側の視線は、相手の(関わる側にとっての)困った点、難しい点に固定されてしまっていたり、その困った点も別の見方、捉え方、解釈が可能かもしれないが「困った」という見方に固まってしまっていたりする。人はある一面だけを持っているわけではないし、多様な面を見ながら、つき合える面を探したり、ある一面に対して、別の捉え方をするなど、関わる側の見方や捉え方の操作によって関係を変化させることも可能である。生きる上での、人と関わる上での様々な問題、課題は、個人が抱えていることもあるが、個と個の関係、向き合い方、関わる側の見方の中にある、関わる側の内面世界に生じているということもできる。とすれば、関わる側が、相手(人に限らず様々な事象)を見る際の世界観を、自己の内面を、いかに操作するかという

ことも重要な視点となる。

人(子ども)を見ると、特に教育等においては、客観的に見る、評価することが要求されることが多い。しかし、人(子ども)を見ることは、常に相手に対して自己の世界を投影するという側面を持っている。人がそれぞれに持っている価値観、世界観は多様で異なっている。読書好きの人もいれば、体を動かすことが好きな人もいる。赤い色が好き、青い色が好き、それぞれである。人(子ども)を見ると、この世界観、価値観の影響を完全に振り払うことは難しい。見られる側は、その世界観を通して、自己を見つめることになる。このように考えると、相互の見方が不快な状態として固定すると、関係が難しい状態になる。私たちは、常に自己の見方が相手に(特に子どもには)影響を与えることを意識して、自己の世界観を見つめる作業が必要だろう。

### (2)手持ちの力を使うこと、今ここを味わうこと、いい時間を過ごすこと

教育においては基礎から応用へという流れが多い。また教育だけでなく日々の子育てにおいても、子どものできないこと、未熟な点が課題とされ、何かができるようになること、力を身につけること、上手になることに価値がおかれることが多い。確かに今より能力が高まる、何かができるようになることは歓迎すべきことであろう。

しかし、人はいつの瞬間も、今ある力で、今の手持ちの力でその一瞬を過ぎさなければならない。明日身につく力で、今を生きることはできない。今は今ある力で生きるしかない。力を身につけること、蓄えること、基礎を固めてから応用に入ること。これらは確かに重要ではあるが、暮らしの一瞬は、常に応用の連続である。時間を止めておいて、その間に基礎を固めてから対処するなんてことはできない。なので、今ある力を使うこと、今ある力を出せること、今ある力で対処することも重要なことと思う。せつかく力を身につけていても出せずじまいということもある。力を蓄えること、身につけることを目指すだけでなく、力をいかに出すか、力を出せる、ということにも教育はもっと取り組んで行く必要があると思う。

それには子どもに対する様々な教育的取り組みが、未来(近いかわいかわい)のために今頑張ろう、今頑張っておこう、ということだけでなく、「今ここ」を充実した時間にするのが大切だと思う。未来の準備のためだけに今があるのではなく、今も生きる本番だからである。

そしてその本番を今の手持ちの力で対処していくこと、そして今ある力で対処できた経験は、持てる力を出すことを育み、生きる力となるだろう。

今の筆者の暮らしを考えてみたとき、自分が一人で、花火や、七夕飾り、節分の豆まきなどをするとは思えない。もちろん人それぞれだし、大人一人でもやっている人は多くいるだろう。しかし、今自分が、それらをやれているとすれば、それは子どもがいるから（我が子という意味だけではない）だと思う。そう考えると、大人の暮らしは子どもの存在によって潤わせてもらっていると考えられることもできる。

たとえばその節分の豆まきで、子どもが「鬼はちよと」と言って豆をまいたとき、「その発音じゃダメだ。“ちよと”じゃない、“そと”だ。もう一度言ってごらん。言えるまで豆はあげませんよ。」などという対応をするだろうか。多くはそのようなことはなく、たとえ「鬼はちよと」でも一緒に楽しく豆まきをして過ごすのではないだろうか。子どもの未熟さ、できなさに目を向け、できるようにすることに力を注ぐばかりでなく、本来、大人は子どもと一緒にこうした「いい時間」を過ごしてきたのだと思う。そしてそれも子どもの成長を支えてきたのではないだろうか。現代は、教育も、育児も、ストレスの多い、困難な状況におかれている。ただ、どこかで大人は子どもの存在によって潤わせてもらっていると思えたら、先生も親も確かに大変だけど、少しは教育を、育児を楽しめるのではないかと思う。

## 6 現代日本社会の中で生きること、子どもと関わる こと、教育・育児に携わること

### (1)マニュアルの時代

以前、社会学者、思想家の最首悟氏のお話を伺ったとき、「大学教育は、イアン教育を捨て、イスト教育にしてしまって墮落した」とおっしゃっていた。イスト教育に傾斜したのは経済界や社会がそれを求める時代になったということなのかもしれないが、イアンは裾野が広く、根源的な哲学をもっているたとえとして、イストは技術重視のたとえとして、教養を深め、考えるということに重きをおく教育から、技術を身につける教育になったというお話だったと思う。考えてみれば「セラピスト」「スペシャリスト」などもイストだが、別にイストが悪いわけではなく、専門学校ではなく大学の教育がそれでいいのだろうか、という意味として受け取った。この議論はともかく、現代は

マニュアルの時代。なんでもマニュアル通りに行い、「自分で考える」ということをしなくなっているとしたら問題である。

あるところで、若いお母さん方と子育ての話をしたときのことが話題になった。次のようなお母さん方とのやりとりの話である。「今は共働きの家庭も多いし、本当に毎日忙しくて余裕はないと思うけど、子どもが話しに来たときには少しの時間でもいいからつきあってあげて」「そんなこと言われても忙しくてそんな時間はないし、毎回毎回つきあえません」「確かにそうよね。じゃあ、3回に1回つきあえない?」

この「3回に1回」にお母さん方はホッとされ、「あ、それならできるかもしれません」と安心される。そこまでならいいのだが、今はマニュアル社会。なんと、「3回に1回」が一人歩きしマニュアルとなり、本当に「3回に1回」子どもの相手をする人もいるというのである。「お母さん、今日ね、面白いことあったんだよ。聞いて、聞いて。」（母の独り言）まだ1回目だから聞かなくてもいいな。」という具合である。もちろん「3回に1回」はそういう意味ではない。しかし「〇〇先生が子どもの話は3回に1回聞きなさいと言われました」と、マニュアルになってしまう。マニュアルが重宝される社会は、人々から考えることを奪ってしまう危険性をはらんでいる。

日々、いろいろなことに直面し、どうしていいのか分からないとき、マニュアルは確かに役に立つ。先達の知恵は凄いいし、ありがたいと思う。教育においても、先達が苦勞し悩み考え、試行錯誤しつつ実践・研究を積み重ねてきた結果として、様々な指導法、マニュアルがもたらされている。多くの教育実践に裏付けられ検討されてきた指導法、マニュアルは価値あるものと思う。より精度の高いマニュアルを目指したり、利用しやすいものを目指したりと日々進歩してもいる。

ただ、指導法やマニュアルを利用するのは、多くは、そのように苦勞しながら考えマニュアルを作った人ではなく、完成したマニュアルを手にとった人である。指導法やマニュアルは対象範囲の子どもに対してであれば、ある程度は誰でも利用可能ということが目指されるが、やはり優れた指導法、マニュアルも、どんな人が使うかによっては子どもへの影響・効果は異なると思う。

もちろん、使いこなすための技術や、熟練することは使い手にも要求されるが、そうした点とは別に、使う人の内面、価値観、世界観、子どもへの思いなどによるところが大きいのではないかと

も思う。子どもにとっては、同じ指導法でも、どんな人と一緒にやるかによっては違うということ。同じ指導法、マニュアルを用いた教育実践でも「こんなこともできないようでは生きていけないよ」と思いながら子どもと関わる教師と、「あなたは十分生きていけるよ」と思いながら子どもと関わる教師では異なるだろう。吃音に対してたとえば「吃音は恥ずべきもの、劣ったもの」と考える教師と「吃音は決して恥ずべきものでも劣ったものでもない」と考える教師では、形は同じ取り組みをしても、全く違った実践になるだろう。

マニュアル社会を様々に考えるにつけ、誰でも使える、利用できる便利さの裏で、使う人の内面、世界観を見つめること、目の前の子ども（人）とどうつき合ったらよいのか考えることが希薄にならないような手だてが必要に思う。

## (2)自己肯定・子ども主体

近年、自己肯定感、あるいはそれに類することばを聞く機会が多い。それだけ現代は自己肯定感が持ちにくい、自己否定に陥りやすい時代というか、そういった人が多い状況なのだろう。

一般的には、他者から認められること、自分が役立つ存在であることを実感すること、自己のよさに気づくこと、得意なことを伸ばすこと、仲間の存在、周囲の理解、等々が自己肯定を支える要素となる。筆者も、吃音のある子どもの自己肯定感支援に関する研究に取り組んだが、その中でも、上記のことや、自分を理解する、自分の吃音、自分の特徴を知る、学ぶことの重要性が議論された。

自分の体質をよく知ることで、対処可能なことも見つかるのと同様、吃音についても自分の吃音を知り、学ぶことが大切と考えられる。親や教師は、子どものありのままを本当に認める、子どもに自分は自分でいいんだと絶対的な肯定感を与えられるような存在であると同時に、子どもが自分自身と（吃音と）つき合っていく上での伴走者のような存在でいることが求められると思う。

白梅学園大学の汐見稔幸先生から、日本とフランスの保育の比較研究の話をつかっていたことがある。日仏の保育場面を収録し、検討し合うというものであるが、たとえば、子どもがハイハイしている場面。日本の保育士は、「すごい、すごい、じょうず、じょうず、もうちょっと、もうちょっと、ほらほら、先生ここよ、・・・。」と声をかけている。フランスの保育場面では、保育士は見守っているだけである。その場面を見ての日仏の議論。「あ

れは、何をやっているのですか。」「子どもがハイハイを一生懸命頑張っているの、応援したくなって、声をかけているんです」「そんなことをしたら、あの子はあそこまで行かないといけないと思ってしまうのではないですか。そもそもあの子はあそこまで行きたいのでしょうか。なんで日本の保育士は自分好みの行動をさせたがるのですか？」

（以上、筆者の記憶に基づく概略）

人は自分の意思で取り組んでいる、頑張っていると思っていたことが、実は他人の期待に添っていただけだった、他人に従わされていた、と気づけば愕然とする。自分で決める、選ぶということが結局人の期待に従っていることだとすると、自尊感情、自己肯定感を阻害することにもなる。

そもそも日仏の文化の成り立ちが違うので、ここで善し悪しを論じるつもりはない。日本は共感すること、子どもの気持ちを感じるということに優れた面があると思う。ただ、フランスのように自分で決めるということを大切にすることのもつ意味は大きいとも思う。自分が主体であるということを感じ、自尊感情、自己肯定感につながっていく。日本においては失敗しないように教える、いいことだからそうさせる、という先回りはよく見られるが（お節介、押しつけ、様々な表現の仕方があるが）、それらが、自分で決めること、自己決定の機会を奪っているという見方もできる。

「吃音」についても、親、教師、人の期待や考え（もっと広くいえば周囲の、社会の価値観）が、本人にかなりの縛りを与えているように思う。自分で考え、自分で決めること。様々な情報をもたらしたり、支援を受けつつも、押しつけではなく自分の意思で吃音との、自分自身との向き合い方を決めること。自分の意思で取り組むこと。こうしたことの大切さを思うとき、その縛りを解き放っていくための取り組みをもっともっとしていかなければと思えてくる。

## 7. おわりに

自分を振り返りつつ雑感を綴っていたら、読みにくい、独りよがりの論考になってしまったこと、ご容赦いただければと思う。筆者自身は、今後も当事者の方、ことばの教室の先生方、保護者の方、様々な人とつながりながら、学び合いながら、それぞれの立場の人たちに返せる仕事をしていきたいと思っている。今後の日本吃音臨床研究会と、『スタタリング・ナウ』の発展を祈り稿を閉じたい。